

妙齡

泉鏡花

青空文庫

あめひ 雨の日のつれ／＼に、ほとけをし佛、むかそれくに教へてのたまはく、昔某の國に一
つぷ婦ありて女を生めり。こをあたか此の婦恰も弱竹の如くにして、うま生れし女
たまごとたまごととしと。年はじめて三歳、こくくんそ國君其の色を聞き召し、すなはごと仍ち御
てん玉の如し。あそ年はじめて三歳、さんさい國君其の色を聞き召し、たま仍ち御
むか殿にお迎へ遊ばし、たなごころす掌に据ゑられしが、たちま忽ち恍惚となり給ふ。
さ然るにても其の餘りの美しさに、のちくにひととなりて後國を傾くる憂も
やとてやとて、たうじこくちう當時國中に聞えたる、だうじん道人何某を召出して、ちか近
ちかう、なんぢ近う、こ爾よく此の可愛きものを想せよ、おほと仰せらる。名道
じかしこま人畏り、しろ白き長き鬚を撫で、かほあどなき顔を仰向けに、てん天眼鏡
ををかぎせし状、さま花の蒼に月さして、ゆき雪の散るにも似たりけり。
しがやがて退りて、て手を支へ、はは、まをし申上げ奉る。おう應、なん何とぢ

や、とお待兼ね。名道人謹んで、微妙うもおはしまし候ものか
 な。妙齡に至らせ給ひなば、あはれ才徳かね備はり、希有の
 夫人とならせ給はん。即ち、近ごろの流行の良妻賢母にま
 しますべし。然りながら、我が君主、無禮なる儀には候へども、
 此の姫、殿の夫人とならせたまふ前に、餘所の夫の候ぞや。何と
 と殿様、片膝屹と立てたまへば、唯唯、唯、恐れながら、打
 槌はづれ候ても、天眼鏡は淨玻璃なり、此の女、夫あり
 て、後ならでは、殿の御手に入り難し、と憚らずこそ申しけれ。
 殿よツク聞し召し、呵々と笑はせ給ひ、余を誰ぢやと心得
 る。コリヤ道人、爾が天眼鏡は違はずとも、草木を靡かす
 われ我なるぞよ。金の力と權威を以て、見事に此の女祕藏し見すべし、

再びふたゝこれ是を阿母おふくろの胎内たいないに戻すことこそ叶かなはずとも、などか其その術すべのなからんや、いで立たちどころ處しるしみに驗つるを見せう。鶴つるよ、來こいよ、と呼よびたまへば、折をりから天下てんかたいへい太平たいへいの、蒼あをぞらたか空の高く伸のしたりける、丹頂たんちやうせんざい千歳ちよんざいの鶴つる一羽いちば、ふはくと舞まひ下おりて、雪ゆきに末すゑぐろ黒くろの大だ紋いもんの袖そでを絞しぼつて畏かしこまる。殿との、御覽ごらんじ、早さつそく速しよくの伺しこうくわぶんく候過くわ分ぶん々くと御お召めしの御用ごようが御用ごようだけ、一寸ちよつとお世辭せじを下くだし置おかれ、扱さてしか／＼の仔細しさいなり。萬事ばんじ其その方ほうに相あひまかせる、此このものいづこ女何處にてもなにても伴ともなひ行き、妙齡としごろを我わが手てに入れんまで、人目ひとめにかけず藏かくし置おけ。ひつき日月ひつきにはともあらん、夜分やぶんな星ほしにも覗のぞかすな、心得こころえたか、このたまへば、赤あかい頭巾づきんを着きた親仁おやぢくちばしも、嘴ゆかを以もて床たを叩たたき、項うなじを垂たれて承うけたまはの殿の膝ひざにおはします、三三さんさい歳さいの君きみをふうはり、白しろき翼つばさに

掻い抱かいたき、脚あしを縮ちぢめて御庭おんにはの松まつの梢こずゑを離はなれ行ゆく。

恚かくて可すさまじ凄まくも又また可おそろし恐おほき、大薩摩おほさつまヶ嶽たけの半なかばに雲くもを貫つらぬく、

大木たいぼくの樹みきの高たかき枝えだに綾あやにしき錦すいの巢いとを營なみ、こゝに女むすめを据すゑ置おき

しが、固もとより其その處ところを選えらびたれば、梢こずゑは猿ましらも傳つたふべからず、下したは

矢やを射いる谷たに川がはなり。富士河ふじがはの船ふねも寄よせ難がたし。はぐくみ參まゐらす三さ

度んどのものも、殿とのの御扶持ごふちを賜たまはりて、鶴つるが虚こくう空はこを運はこびしかば、今いま

は憂慮きづかふ事ことなし？ とて、年とし月つきを經ふる夜よ毎ごと々く々く、殿とのは美うつくしき夢ゆめ

見みておはしぬ。

恚かくてぞありける。あゝ、日ひは何いつ時つぞ、天てんより星ほ一びつつ、はたと

落おちて、卵たまごの如ごとき石いしとなり、其その水みな上かみの方かたよりしてカラカラと

流ながれ來くる。又またあとより枝えだ一ひと枝えだ、桂かつらの葉はの茂しげりたるが、藍あゐに緑みどりを

翻し、渦を捲いてぞ流れ来る。續いて一人の美少年、何處より
 落ちたりけん、華嚴の瀧の底を抜けて、巖の缺と藻屑とともに、
 雲より落ちつと覺しきが、助けを呼ぶか諸手を上げて、眞俯向け
 に流れ來しが、あはよく巖に住まりて、一瀬造れる件の石に、は
 た其の桂の枝まつはりたるに、衣の裾を巻き込まれ、辛くも其の
 身をせき留めつ。恰もよし横ざまに崖を生ひ出でて、名を知らぬ
 花咲きたる、樹の枝に縋りつも、ぶぶ濡れのまゝ這ひ上りし、美
 しき男なれば、これさへ水の垂るばかり。草をつかみ、樹を辿り
 て、次第に上へ攀上る。雫の餘波、蔓にかゝりて、玉の簾の靡
 くが如く、頓てぞ大木を樹上つて、梢の閨を探り得しが、鶴が
 齊眉く美女と雲の中なる契を結びぬ。

さと ことば
 里の言葉を知らぬ身も、戀には女賢うして、袖に袂に蔽ひしが、
 つきひた
 月日經つまゝ、鶴はさすがに年の功、己が頭の色や添ふ、女の乳
 いろ
 の色づきけるに、總毛を振つて仰天し、遍く木の葉を搔搜
 をとこすそ みだ
 して、男の裾を見出ししかば、ものをも言はず一嘴、引咬
 は と
 へて撥ね飛ばせば、美少年はもんどり打つて、天上に舞
 が
 上り、雲雀の姿もなかりしとぞ。

げめんによぼさつ ないしんによやしや
 外面女菩薩 — 内心如夜叉

こころえ
 心得たか、と語らせ給へば、羅漢の末席に侍ひて、悟
 ほ
 顔の周梨槃特、好もしげなる目色にて、わが佛、わが佛、殿
 だうじん もんだふ
 と道人の問答より、木の葉を衾の男女の睦言、もそつ
 と
 とお説きなされと言ふ。佛、苦笑したまひて、我は知らずと

のたまひぬ。

明治四十一年五月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妙齡
泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>